



# 永久平和を願って 次世代に戦争体験を語り継ぎたい

私の戦争体験談 10

秘書広報課  
☎24-8801



はじめに  
戦後70年、戦争体験者も高齢となり、「戦争」が風化されつつある今日、「広報丸亀」の「戦争体験談募集」の記事を見て、この機会を逃してはいけな  
執りました。

て、終戦、引き揚げ……。そして、今年92歳を迎えます。  
**荒野の行軍 戦闘そして行軍**  
入隊して、2週間で転属命令を受ける。日々厳しくなる戦況のどこに行くかは誰も知らない。軍装は、防寒具のみ、銃はほとんど無いまま閩釜連絡船に乗船。列車で朝鮮半島（当時日本領）を北上、さらに中国国境（山海関）を越える。太陽が東の地平線から昇り、西の地平線に沈む。南京・上海方面へ。

## 昭和19年秋、19歳で「赤紙」 大陸での青春時代3年間

土居町 今田武二良さん

たのだが、当時「アメリカ軍が台湾方面から、福建省あたりに上陸してくる」という情報があり、それに備えるための南進だったようだ。  
一さて、私は重機関銃中隊に配属された。重機関銃は分解し、一人

き、空はゆっくり白んでくる。行軍に次ぐ行軍、梅雨時はずぶ濡れになり、炎天下は避けて、夜間の行軍。暗闇の中、睡魔と過労との戦い。  
忘れられない戦いがある。白石峠の戦いである。撤収のため、上

海へ向けて北進する日本軍は、中国の正規軍や匪賊、馬賊などから見れば手負いの獲物に見えるのだろうか……。待ち伏せに合った。敵の弾が、頭や身の回りに、ブスブスと突き刺さる、小さな石でも弾避けに頭の前に置いたりもした。多くの犠牲者が出た。また、ある日の早朝、大きな城壁に差し掛かったとき、突然城壁の上から「パンパン」という銃声がした。突然の敵襲。味方重機が火を噴いた。大砲は城門を打ち破る、すると、軍刀をかざして将校が突入、兵隊たちも歓声を上げてそれに続く、「歩兵の本領」とでもいうか凄まじいものを見た。潜んでいた多くの敵兵は、1キロ先の城門の一角から逃げ出て土蔵に入って行くのを確認。それを重機関銃で狙い打つ。土蔵には大砲をぶち込む。土蔵が傾いた。これが戦争。殺るか殺られるか……。

### 子どもたちの笑顔と水牛 なんで戦争するんだろ

上海近郊に到着。上海に軍曹と出張に出掛ける。街は賑わい果物やパンがたくさん並んでいる。浴衣姿の日本人女性が優雅に見える。映画館でエノケンの映画を観た。その時ニュースを見て驚いた。B29の空襲、新型爆弾（原子

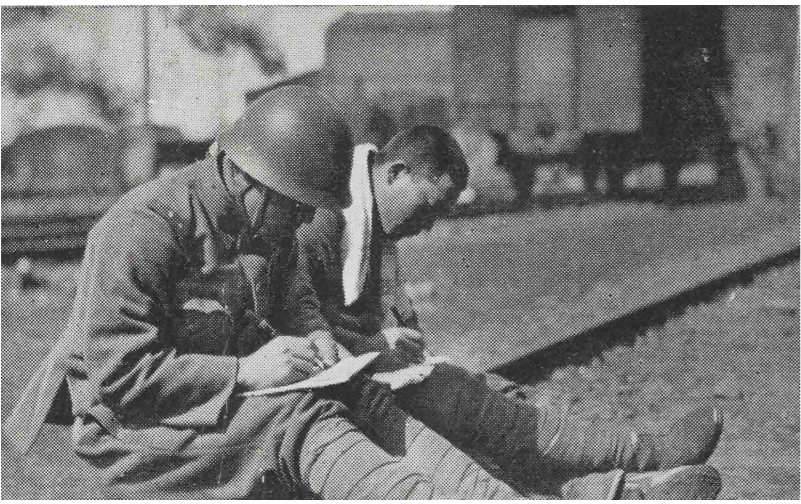
### あとがき

荒廃したあの時代、生き抜いてきた人たちがまた、不幸にして犠牲になられた人たちが、築き上げて来てくれた今日の日本。中国の偉人曰く「国敗れて山河あり、城春にして草木深し」の詩のごとく、都市も荒廃から四季が巡り、草木が茂り、緑となし、花は咲き、人々に生きる希望と復興の力を与えてくれた。資源の乏しい日本が、今日の経済大国として列国に準じて来たのは、平和な中で、医療、科学、資源の開発等技術立国として、世界に貢献できるように頑張ってきた賜物と思う。

2度と戦争はしない日本、平和で緑豊かな暮らしができますよう、これからの方々にぜひお願い申し上げます。  
※筆者は、昨年末他界されました。ご冥福をお祈りします。

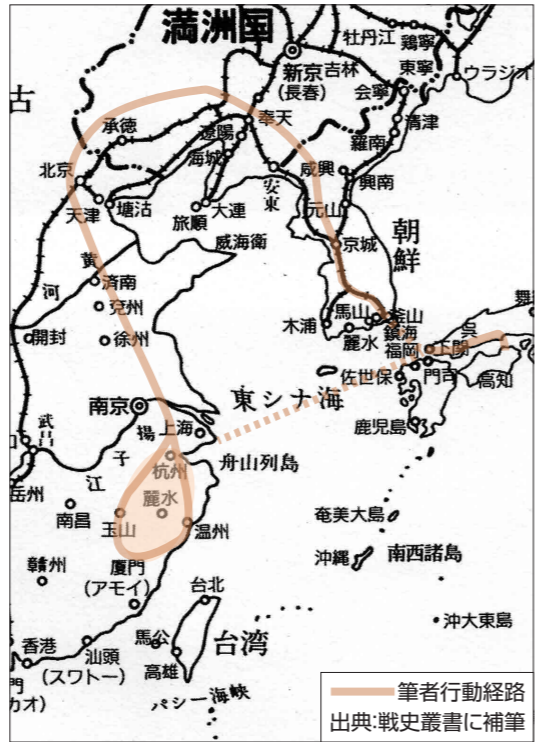
#### 用語の説明

- 歩哨 陣地などの要所に立って警戒、監視にあたること
- 地雷 多量の爆薬を入れ、水面下や海底に敷設し、艦船がふれたら、近づいたときに爆発して、破壊、沈没させる水雷
- MP アメリカ陸軍の憲兵（軍隊内の警察活動をする兵隊）
- DDT 農薬の一種



懐かしい故郷へ陣中で手紙を書く兵士 提供：平和祈念展示資料館

爆弾）も知った。冷汗が出た。家族の顔が浮かぶ。  
夕方、外で慌ただしい声を聞く。8月14日だった。「日本は戦争に負けた。上海で中国人が暴動、略奪」と騒いでいる。大変なことになった。翌15日正午、大体本部の中庭のラジオで玉音放送を聞く。これで戦争が終わったと知った。  
終戦後も、中国側からの要請で、銃を持ち街の治安維持に当たる。やがて、武装解除、十分手入れされた銃、軍刀、武器弾薬が、中国軍に引き渡される。血涙、断腸の思いは皆同じである。



筆者行動経路 出典：戦史叢書に補筆

「この作戦で戦野に散った戦友のご冥福を心からお祈り致します 合掌」  
何日か経ったある日、水牛を使って水車を回している子どもたちを見つけた。我々が、少し覚えた中国語で近づいていくと話し返してくれる。笑顔がとてもかわいい。「名古屋に行きたいことがある」「日本に行きたい」という子もいた。やがて、父親たちも連れてくる。日中友好・親善の平和なひと時だった。なんで戦争なんてするのだろう。

### 待ちかねた「かえり船」 感無量。家族との再会

終戦後半年も経つと、「いつ帰るか」と、皆そればかりの思いである。「もう近々帰れる」と聞いて

ては何度も延びてきたが、今度は確かなようだ。「立つ鳥跡を濁さず」宿舎をみんまできれいに掃除する。いよいよ乗船1000トンの船は、客室もデッキも人でいっぱい。  
夜間は、機雷に触れる危険から、朝日とともに出港。田端義夫の「かえり船」だ。  
玄界灘から博多港に入港。いよいよ上陸。「生きて祖国に帰って来た」と実感した。港は、復員兵や迎えの人たちで混雑している。MPたちが、我々にDDTを噴きかける、背中からスポンの中心まで真っ白だ。  
宇野から、連絡船で高松に着いた。「あつ」と驚きで、一瞬息が止まったような気がした。港から紫雲山まで焼け野原。「空襲があったとは聞いていたが、これほど無残な光景を眺めるとは。さぞ多くの犠牲者が出ただろう」丸亀駅に着いて、家族との再会。全員無事で元気な姿で会えた。嬉しさの上無し。